

漢江社だより

第5号
平成21年11月発行

結繩に想う

乾 長江

戦後の混乱期も落ちついてきたのは、昭和二十二、三年の頃であつたらうか。神田の本屋街にも、ちらほら本を並べる店が目立つようになった。戦災で、蔵書のすべてを失った私には、店先に並べられた本が、どんなにか美しいものに見えたことか。感激であつた。

久しぶりで神田の町を歩いた私は、この日、何冊かの本を買った。

中の一冊に、「沖繩結繩考」という題名の本がある。著者は、田代安定、校訂者は、長谷部言人、昭和二十年七月二十日発行、発行者、奈良県丹波市、株式会社養徳社代表中市弘、原本は、東京帝国大学人類学教室蔵とある。

昭和二十年七月と云えば、太平洋戦争の

終焉の年である。日本軍は、南太平洋の各地で敗退、国内の主要都市は被爆、東京は連日の大空襲、沖繩の全滅、広島長

崎の原爆投下、このような戦争の最中に、どのような思いでこの本はつくられたのであろうか。学問を愛し、これを次の世代に伝えるために、これを死守しようとする学者の使命感に、ただならぬものを感じる。又、時期も時期であり、出版者の苦勞も並大抵のことではなかつたであらう。

この時から、私は、改めて結繩に興味をもつようになった。

そもそも、結繩に就いては、古代中国の古典、礼記、易経、老子、莊子などに記載されているが、その形状に就いては明かでない。

史記三白紀の条には「始めて八卦を画き、書契（甲骨文に近い様なもの？）を造り、以て結繩の政に代える」とあり、時は、新石器時代と想定される。「上古、未だ文字あらず、大事には、即ち大繩を結び、小事には、即ち小繩

を以て之を記す」と。原始社会の当時の様子が窺はれる。

説文の序に「神農氏に及び、結繩を治と為し、以て其の事を統ぶ。庶業それ繁飾して、偽、萌生す」と。古代人も、現代人も人間の世の中は変わらないようである。「黄帝の史、倉頡、鳥獸の蹄迹の迹を見て、分理の相い別れ異なる可きを見て、初めて、書契を造り、百工（官吏工人をさす）以て、万品を父り（調べる）もつて、察らかに、諸を蓋取す」と。茲に、書契をもつて結繩の政に代える。

この結繩の方法から一歩進んだ書契の社会へと変り、夏・殷・周・秦の時代を経て、中国の文字は、著しく進化し、美しい篆・



銀座・竹川画廊にて（1964 58才）

隷の時代に移行する。そして、やがて、漢晋の謂所、書の黄金時代を迎えることになる。

茲に、漢字のもつ表意の仕組は、書に自在の表現を与えるようになる。自由な発想が生れる、原始的記標の面白さは、幻想的詩魂をかりたてる。

ところで、こうした結繩が、明治の初期に沖繩で発見されたのである。

明治十八年、田代安定は、帝国大学の囑託として、太平洋諸島の人類学的調査に従事し、沖繩諸島視察の折、宮古八重山諸島に於て、結繩を発見、なほ當時、部落の中には、結繩法を使用しているものもいた。

田代は「沖繩結繩考」の中で詳細な資料あつめ、綿密な解説をしている。文化史上の大いなる功績といえよう。

又、結繩については、南米のインカに残るキープ (Quips—繩環) がある。

インカ文明は、十五世紀から十六世紀の初頭にかけて、南アメリカのペルー南部高原クスコを中心としたアンデスに、インカ帝国を建てた。南インデオの創造した文明である。

一説には、十二世紀、クスコ周辺に住み、

太陽神を崇拜する農耕民族ケチュア族に端を発するといわれている。

インカは、天文、地文、暦法、測量、建築、砒山に至るまで広い範囲の文化をもつていたが、最後まで文字を使用しなかつた。しかし、インカは、記録のすべてを結繩にたよつた。記憶や計算だけでなく、事件の考察、考え方まで結繩で表したという。

結繩を扱う専門職や官吏もおり、様様な事柄をたくみに使いわけていた。彼らは、繩の結び目だけでは意味もわからない人に対して、解説をつける語部のような説明者でもあつた。

さきに述べた様に、私が結繩に興味をもつてから久しくなる。

インカにも 沖繩にも残る

結繩の

太古の すがた思いしるべし

繩織に 陶器にも遺戒とど

めんと

文字なき時の 大同の民

仰韶彩陶

いみじくも 書は散なりといふ説を
仰韶土器の文様に見る

結繩を 書契に代えしことどもを
政治の改革と 説文は説く

*散は心の表現

(註) この遺稿は草稿のかたちでみつかつた原稿をそのまま掲載しております。

結繩に想う

乾 長江

戦後の混乱期も蓋ついできたのは、昭和二十三年の頃であつたらうか。神田の本屋街にも、ちらほら本を並ぶ店が目立つようになつた。戦災で、蔵書のすべてを失つた私に、店先に並べられた本が、どんなにか美しいものに見えたことが、感激であつた。
久きしぐりで神田の町を歩いた私は、この
日、何冊かの本を買つた。

新授号者紹介

音楽と書の世界

杉山 瑤華（純子）

私は平素、小さなお子さんに音感教育をしています。音感教育といっても音楽的なことを指導する前に、お行儀を教えたり、言葉を教えたり、人の指示に従うことなど、人としての基本的なルールを教えることに重点をおいています。この規則が理解できる子供から順に音感が身についていくと言えます。これは他の分野でも同じ成果が見られることでしょう。

私がお習字のお稽古を始めたのは十八年前。仕事を終えてからの夜、比較的職場にも自宅にも近い三宅玲子（白玲）先生のお宅に伺うようになりまし。まず基本筆法で筆の使い方をお教えいただき、すぐに草書のお手本を渡された時には驚きました。素人には日常的に使用されている楷書からは始めるのが普通であるという概念があったからです。お話を伺うと、文字の起源を

知るため草、假名、隸、篆と古典を学び、その集大成が「楷書」であるとのこと。私自身、書き初めはうまくいかなかったも、段階的なお手本に従ってお稽古を継続してみ、乾長江先生が考案されたこのカリキュラムは緻密で、確実に身につけていくものであると実感しています。

又、空間の美、芯のある線、相対する文字のバランスとリズム、突出しない統一された書体の美等、学ぼうちに気づいたことは、平素、私共に楽院長が言われる「空間にも音がある。美しい音楽は統一された響きから。力強さとは乱暴ではない。弱い音はか弱いのではなく最後まで気を抜かない余韻を持った豊かな響き」という言葉で思い起こさせます。全く別の分野だと思っていた音楽と書の世界、真髓の部分では同じ精神が流れていると思えてくるのです。週に一度、先生の下での数時間のお稽古ですが、幸運にも出会うことのできた淡江社の書の道を途切れさせることのないよう、歩んでいきたいと思えます。

*楽院長・木下式音感教育法創始者

乾長江先生の書作を高く評価した一文が、中国で発表されました。

「乾長江遺墨展」に際して任道斌氏より寄せられた序文の全文が、同氏の著作『思嘉室集』全三巻（中国美術出版社より二〇〇九年出版）の下巻「思嘉室読書録」十二篇のうち的一篇として収められたものです。

任道斌氏は、中国の国立大学である中国美術学院の国際教育学院の院長であり、中国芸術史の研究者として大変著名な方です。

「腹中有詩書、落筆乃典雅——日本の『乾長江作品集』を読む」と題した一文ですが、原文ならびに日本語訳は淡江社のホームページでご覧いただけます。



授号についての想い

亀井玉映（佑子）

淡江社に入会したのは、展覧会に出展するようになった、四〇歳代だと思います。お習字を始めたのは、職場と大学の先輩であった桜田経子先生に手ほどきを受けた二〇歳代でした。その後、四〇歳半ばまでは細々とお稽古を続けていました。桜田先生が、腱鞘炎で筆を持つのが不自由になられてから、下落合教室に通うようになり、本先生、二見先生のご指導を受け、現在があります。乾たみ奥様、塚本尋様も、若い時代に職場でご一緒した方々です。今回、授号ということになりましたが、時間の経過をそれほど感じていない状況です。

雅号「玉映」の由来は、私にとっては、大変意義深く因縁めいています。

郷里、鳥取県米子市の近郊にある古代の砂鉄の神を祭った楽々福神社の平成三年の正遷宮の際、本殿の一隅に掛けてあった額が取り外されました。その額には、明治三〇年の正遷宮の際、記念に近郷から募集した俳句の抜粋の約一五〇句が書かれていることが判明しました。その奉納俳句募集の発



起人の中に、祖父光木勇治もいました。祖父と共に曾祖父光木勇蔵の俳句も載っています。俳号はそれぞれ「一映」、「真映」でした。実家を継いでいる博子氏から、是非この「映」の字を号の一部に入れていただきたらどうかとの助言もあり、二見先生にお

話をした所、その意を汲んで、「玉映」という号を頂くことになりました。

「玉」には才能や、光沢があり美しい石という意味があります。今後、研鑽を積み、「玉」を磨き、「映」の字のように照り輝いて光を放ち、社会に役立つ人になって欲しいという願いがこめられていると、ご説明がありました。母校の校歌にも「みがかずば玉も鏡も何かせん。学びの道もかくこそありけれ。」とあるのを思い起こしました。これからどう生くべきかが問われます。皆様のご指導をお願いいたします。

お名前をいただいて

満田 棕 花（まゆみ）

お習字を始めて十七年。まだまだ納得のいかない字を書いている私が、どういう訳かお名前をいただいていたしまいました。授号の打診を受けた時に、時間を戻せるなら絶対にお断りするのだったと後悔しております。

思い返せば、お習字を始めたいと思ったきっかけは、「年賀状の宛名書き」でした。結婚以来、忙しい中、主人が書いてくれて

いるのでお手伝いしたかったです。習いはじめて最初の年賀状に大きく「酉」を書いて得意になったのを思い出します。以来千支をいろいろな書体でかいては喜んでおられます。宛名書きは、あいかわらず今も主人担当ですが……。

得意といえば、今までの作品は、わが家の特別な場所に飾られており、ご覧になった方が「まゆみ書」の落款に気づかれておほめの言葉を下さる事です。詩文の読み方や、詩文にうたわれている内容の説明で話がはずみます。

先日は中国の方がおいでになり「これは誰もが暗記している有名な詩だ」と「空山不見人 但聞人語響」と、朗々とよみあげてください、中国と日本は文化を共有できる隣国なのだと、あらためて感じ、書を通して身近な日中友好に貢献できたよううれしくなりました。

細々とではありますが、稽古をつづけ授号という一つの区切りに辿りつけたのは、金丸先生のお人柄と忍耐強いご指導のおかげと感謝しております。

折にふれ金丸先生から伺う長江先生の思い出も心に残ります。書に対する真摯な姿

勢から生まれる格調高い書。お会いしたことはなくとも遺筆を拝見するたび襟を正し、清い気持ちで自分も筆を執ろうと思わされます。

「棕花」の名に恥じないよう天上にまっすぐ伸び、高い所で花を咲かせ、実をつけることをめざしていきたいと思えます。

書を学んで

湊 翠松（禎子）

本 松園先生に御指導頂くようになりましたのが昭和六十二年、恥かしくない字を書けるようになりたい一心からでした。文字通り五十の手習、生れて初めて筆を手に、夢に向かって一歩踏み出しました。私は音楽を専門として居りまして、仕事の都合や、又親の介護等で、お休みさせて頂くことが多く、先生にご迷惑ばかりお掛けして居りました。三歩進んで二歩下がるなら未だしも、三歩も四歩も下がって居りましたが、先生は忍耐強く温かく見守って下さいました。

何度も受ける同じご注意、こんなはずは……、と焦ら立つ私をじっと待って下さる

先生から自然と、私のフルートのレッスン法が変って参りました。優しくなったかも知れませんが、又、十分自覚して居たつもりでしたが、書道を通して改めて基本の大切さを先生から学ばせて頂きました。目下「基本の基」が私の口癖になって居ります。

それにしましても、本道の方は遅々とした歩みでしたが、平成十九年、授号のお話、「翠松」の雅号を頂き、夢のような気持ちになりました。先生がお示し下さった幾つかの中から、私はどうしても先生のお名前の一字を頂きたく厚顔しくも、「松」の字を頂きました。

これから、どんどん気力、体力共に低下する年代ですが、これにめげず、今まで六十年間振り廻して参りましたフルートと共に、筆をしっかりと握り締め、焦らず精進して参る所存でございます。



書との出会い (第四回)

大岡 瑛川

「書との出会い」などと大層な題をつけて書き出したものの、三回目シベリアから生還したところで筆が止まっている。先を急いでその後の六〇年を二回に分けて、一応の締め括りをつけようと思う。

復員・再就職

昭和二十三年七月末に、やっと我が家に帰り着いたが、父母共に六十歳を超え、特に母は乳癌手術後昨日退院したばかりという所へ帰ったので、早速家事一切を背負い込んで大車輪の活躍をする羽目になってしまった。

同時に働き口を探すのだが、結局旧台湾銀行との縁故で化学繊維会社に就職したのは、半年後の翌年一月だった。仕事は会計係で、敗戦後三年経ち日本経済も復興期に入り、幸い会社の内容も順調に伸びている時期で忙しく働いた。母も健康を回復し、

前から続けていたお茶とお花の先生の仕事を再開し、余生を楽しんでいるかに見え、私もホッととして仕事に専念することが出来た。

昭和二十六年末に結婚し、四年間の徳島工場勤務を挟んで約十八年、この会社で働いた。母が死んだ翌春、東京本社へ転勤となり、長男・次男を二年保育の幼稚園に入させ、荻窪の実家のテレビで皇太子・美智子妃の結婚パレードを見た記憶が鮮明に残っている。今年が御成婚五十年とのこと、歳月の流れに感無量である。

会社内の書

この頃はまだ社内掲示とか転勤・昇格辞令には筆書きが行われていたが、人事部辺りには能書家が居て腕を揮っていた。私は経理関係の証憑等を整理製本した白ボール紙に思いつき「基本筆法」に忠実な文字で表題を書き、「大岡さんの固い字」を印象づける程度だった。帳簿の転記ミス無くす為事務の機械化などを模索し始めた頃で、その後のコピー機・電算機・ワープロ・パソコン等の普及を考えると、隔世の感がある。

徳島工場に赴任した時、つい最近日展に入選したと評判の書家（社員）が居て、私が入社間もない社宅に入るときに表札はその方が書いたという立派なものを総務課から渡されて有難く頂いた。

慶應義塾書道会と淡江社

戦争中から戦後暫くは、乾長江先生は会社勤めに出られていた。慶應義塾書道会は、指導者不在、資材不足の中で、復員した学生や先輩達の尽力で再建に努めつつあった。私も帰国後直ぐ、中落合の先生宅へ挨拶に伺った。その時は妹さんにしかお目にかかれなかったが、その後で一夜、長江先生の居られた後楽園スタジアムの中華料理店で塾書道会の仲間と、久し振りに会合し、生き残った喜びを語り合ったことがある。しかし、それ以後は、私は自分の生活建直しに紛れて書道会とは疎遠になって行った。



長江先生が漸く書家としての活動を再開される頃、書道会同期で萩窪に住んでいて親しかった山岡君に誘われて淡江社設立準備委員会に顔を出した縁で、同人に推挙され、以来翰墨展は必ず見学して、淡江社の発展を目の当たりにして来た。中でも新人の書は、学生時代二年半学んだだけの私には最も近いものに見え懐かしかった。会場で節子先生にお会いすると「貴方もおやんなさいな！お上手だったじゃない」と煽られて、今はムリだが何時か暇が出来たら、もう一回勉強し直し度いと思つたものだった。

リストラに会う

戦後物不足の時代には、何でも作れば売れるので繊維業界も好景気を謳歌したが、量より質の時代に、時流に乗り損ねた会社は、経営合理化を図り、今で云うリストラをせざるを得なくなつた。私は部下の肩叩きをした立场上、締切日に辞表を提出して、所謂気楽なサラリーマン生活に終止符を打つた。当時の定年五十五歳まではぬるま湯生活に漬かっているものと考えていた私が、後半の十八年間に四つの中小企業を渡り歩くことになろうとは、その時は自分でも思

いも寄らなかつた。山岡君が亡くなって一周年の墓参に長江先生のお伴をした時は、二度目の浪人生活中で、長江先生から珍しく厳しい口調で短気を戒められたことが、今は懐しい思い出である。

旧友・戦友との交流

淡江社とは前述したように書に対する興味は持ちながら、時間がないのを理由に会員として存在するに止まっていた。

戦後の落着きを取戻すと、中学の同期生、全国に散らばっている戦友達が、ポチポチと集まり出し、その輪を拡げて、定期的な会合も開かれるようになって来た。

案内状を頂くのだが、零細企業に勤める身では、この頃始まった週休二日制とも無縁で、都内の夕食会ぐらいしか参加できず、全国各地で順々に開かれる戦友会などには残念ながら出席できなかつた。

完全リタイア

小さな企業では、私のような事務屋は、社長に命ぜられれば、何でもやらねばならない。そんな時多少でも書の経験があることは役に立った。勤続表彰状なども、その

人に合わせて心の籠もつたものを作れたし、求人募集のパンフレットも、従業員の結婚式に出る社長の祝辞もそう苦勞なく作るこゝとが出来た。

しかし、一旦社長と意見が合わなくなる自分が身を退くしかなかつた。今思えば、もう少し柔軟に身を処することも出来たのではと反省する面もあるが、修養が足りなかつたのでしよう。

六十四歳の三月に、学校卒業後勤めた六つ目の会社を退職して、最後の失業保険を受けながら、余生をどう過ごそうかと考えた。先ず第一に書の勉強を再開することを決意、長江先生をお尋ねすることにした。

以下次号



書道教室ご案内

無理のない正しい筆使いで
字を書いてみませんか。

書についてお気軽に
お尋ね下さい。

ベテランの講師が基礎から
個人指導をしております。

稽古日 木・土曜日 月三回

(電話でのお問い合わせは
稽古日にお問い合わせ致します。)

淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三
電話 〇三―三九五―八一五二
URL <http://www.tankousha.jp>
E-mail tankousha-001@memoad.jp

第二十六回 淡江社翰墨展

会期 平成二十一年十一月二十日(金)

二十五日(水)

会場 有楽町朝日ギャラリー

● 訃報

武田米子 平成二十年十一月十七日

池田外志 平成二十年十一月二十一日

神原江月 平成二十年十二月二十六日

沢浦古逕 平成二十一年六月十六日

長年にわたるご尽力とご功績に感謝申し
上げ、謹んで哀悼の意を表します。



落合に縁を結ぶ百千鳥

表札の墨痕涼しく淡江社

芙蓉咲く書家の玄関靴溢れ

師の愛でし筆硯紙墨の冴ゆるかな

淡江社を詠んだ

神原禮子さんの遺作です。

(俳人協会員)

編集後記

皆様のご協力により「淡江社だより」第五号を出すことができました。又、この号で四人の新しい授号者を紹介させていただきました。心より御祝い申し上げます。

淡江社にはいわゆる段や級がありません。唯ひとつ、授号という区切りがあるだけです。それだけに、号を授かる重みは特別です。そして、それは目的地ではなく、書の道の入口に辿り着いただけであると気付くことでもあるのです。

長江先生の「書は散(心の表現)なり」というお言葉を思い出し、段や級がないことに納得する筆者です。(H・M記)

発行 淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三

電話 〇三―三九五―八一五二

編集委員 大岡瑛川・本松園・塚本尋

三宅白玲・松原白葉

題字 武藤素英